

## 学部留学生の自律的学習能力向上支援 —メタ認知活性化を促す日本語学習を通して—

長谷川順子

### 要旨

本研究では、学部留学生の学士力育成の中核と考えられる自律的学習能力の涵養を目指して、「学習ストラテジーの明示的提示と利用」と「内省活動の定期的実行」というメタ認知の活性化を刺激すると期待される活動を組み込んだ日本語授業を行った。その上で、学習者が毎授業後に記した内省文、コース終了後の期末面談調査結果、コース開始時と終了時に記した学習目標・自己評価表、授業時の行動観察記録を資料として「ストラテジー」と「自己の学習状況」についての意識と学習時の行動を観察し、自律的学習能力の重要な要因とされるメタ認知の変化を観察した。その結果、クラス活動に組み込んだ活動がメタ認知を活性化して学習者の自律的学習能力の向上を誘導する効果があることが示唆された。

### キーワード

学部留学生、自律的学習能力、メタ認知、学習ストラテジー、内省

### 1. 研究の背景と目的

現在、知識基盤社会への変化に伴い、汎用的能力や創造的思考力を中核とした学士力の育成が大学に求められている。学部レベルの留学生対象の日本語教育では、単に日本語の運用力の向上への支援だけでなく、運用に至る前提として、与えられた課題に自ら主体的に取り組んでいく力、論理的に思考し論理的に表現する力を向上させるための支援を行うことが強く求められている。学部レベルでは、レポート作成や口頭発表等、学習・研究活動のための能動的な高い言語能力が必要（札野・辻村 2006）であるが、学部留学生の中には自己の考えを論理的に伝える力が不足している者が少なくないという指摘（村上 2003）や、大学での本質的な学びに繋がる問題発見と問題解決能力の育成が留学生には特に重要であるといった提言（堀井 2006）が見られる。中等教育から高等教育への円滑な適応は日本人学生にとっても大きな試練となり得るが、留学生の場合は、来日前の教育における価値観や学習上の慣習が日本の大学のものとは異なっている可能性もあり、留学生の背景を考慮して自律的学習技能獲得への支援を行う必要があると考えられる。

自律的学習能力の育成方法については、主としてアカデミック・ジャパニーズ教育を巡る議論の中で様々な報告や提言がなされており、自分の能力や環境や課題を客観的に観察するメタ認知を活性化させることが極めて重要であることが知られている。しかし、メタ認知の具体的な表れに焦点化して学習者の認識の把握を試みた研究は未だ少ない。そこで本研究では、学部留学生対象の日本語教育方法への示唆を得るために、学習者のメタ認知の促進を目的とした活動を組み込んで日本語授業を実施し、学習者が記した内省文に出現した「ストラテジー」と「自己の学習状況」についての記述と学習時の行動の観察を通してメタ認知の変化を観察し、組み込んだ活動が及ぼした影響を検証した。

## 2. 先行研究の概観

「自律的学習能力」の重要性は夙に認識されており、この能力の向上を支援する方法を求めて様々な研究や提言が行なわれてきた。

Wenden (1991) は、「タスクの遂行に必要な認知・自己管理ストラテジー」「言語学習に関するメタ認知的知識」「学習に対する主体性や自己の効力感等の態度」を自律的学習者の必須要素とした。すなわち、学習にはより効率的な方法、「ストラテジー」があり得ることを認識してよりよい方法を求めて模索することを「自律性」の具体的表れと捉えていると考えられる。

田中・斎藤 (1993) は、「学習の計画能力」、「自分の学習を客観的に見つめる能力」の重要性を強調している。単に与えられた課題に熱心に取り組むのではなく、自ら計画して学習し、実行したことを観察して評価することが重要だとし、学習の諸側面についての意識化を学習活動の中で進めるよう提言している。

青木 (1996) は“autonomous learning”に与えられた「自律」という日本語訳が、「自らを律する」、あるいは、「教師に言われなくても学習するという意味での自主性」を示唆しがちであることを問題視し、自律学習をより具体的に捉えることを試みている。「自律」を避けて「学習者オートノミー」という用語を使い、これを「学習の目的、目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペース、場所、評価方法等、自分の学習に関する意思決定を自分で行う能力」と定義し、「(学習に伴う諸々の制約下において)自分にとって最善の選択肢を選んでいくこと (青木・中田 2011)」の重要性を強調している。

このように、「自律的学習能力」を巡る諸研究には強調される点や表現にいくらかのずれが認められるものの、いずれも、学習ストラテジーについて意識的であり、よりよい方法を選択する技能を持っていること、それを行う基盤として自分の学習の適否を客観的に評価する能力を有すること、すなわち、メタ認知能力の重要性を認識していると言える。

本研究は、先行研究の指摘に基づいて、自律的学習能力を「自分が取り得る最善の方法を選択して実行し、かつ、自分の学習を客観的に観察・分析して次の計画に活かす能力」と捉える。この定義に基づいて、自律的学習能力の向上を支援する具体的方法を探索するために、授業活動にストラテジーについての明示的学習と自らの学習の進捗状況を内省する文章の執筆を取り入れその効果を観察した。学習者が毎回の授業の最後に作成した内省文、コース終了後に行った面談調査を主なデータとして、「メタ認知知識」(三宮 2008)の一つである「ストラテジーについての意識」と、学習管理に関わる「メタ認知活動」(三宮 同上)に焦点化して、学習ストラテジーについての意識や学習に対する意識の精緻化の様相を分析した。

## 3. 実践したコースの概要

### 3.1 参加者

参加者は、九州地方の工学系単科大学で2016年度後期に筆者が担当した留学生科目の「日本事情」(90分×15週)を受講した情報工学専攻の留学生4名(A~D)である。Aは、国内日本語学校での3年間の学習を経て入学した韓国出身の学部2年生で、Bは、台湾出身の交換留学生である。CとDは、母国で3年間の予備教育を経て学部3年に編入したマレーシア出身学生である。AとBが日本語能力試験のN1に、CとDがN2に合格している。

### 3.2 コースの概要

表1にコースの大まかな流れを、表2に第5週以降に3回繰り返して行った「課題解決型活動」の例を示した。このコースは全15週で、第2-4週に代表的読解ストラテジーの明示的提示を行った。第5週以降は、4技能すべてを活用して「論理的思考、推論等の思考を伴う認知プロセスの意識化（溝上2014）」の促進を目指し、1回に3-4週を費やして、「課題設定→課題解決→まとめ」というプロセスで、課題解決型の活動を行った。3回目の活動の流れを表2に示した。

表1 コースの概要

週	学習活動	
1	オリエンテーション	学習の進め方・内省活動の仕方の確認、学習目標設定
2~4	読解ストラテジー(RS)の活用練習	主なRS: 概要を読み取る・比較する・予測する・予測を確かめる・構造をとらえる・主張を読み取る等
5~7	課題解決学習Ⅰ	テーマ: 血液型占いを好む日本人
8~11	課題解決学習Ⅱ	テーマ: ライフコースに対する若者の考え方
12~15	課題解決学習Ⅲ・まとめ	テーマ: こどもの育て方(ほめるか、叱るか)

表2 課題解決学習の展開例(課題解決学習Ⅲ)

過程	週	主な活動	主な学習ストラテジー
課題設定	第12週	資料Ⅰ(グラフ・意見文)読解 意見交換・インタビューの準備	問題点を見つける・比較する・主張を見つけるキーワードに注目する等
	授業外	インタビュー調査	予測する・予測を確かめる・比較して聞く・友達と協力する等
課題解決	第13週	インタビュー調査報告・意見交換	予測する・予測を確かめる・文章構造をつかむ・主張を読み取る等
	第14週	資料Ⅱ(生教材)読解 意見交換	構成を考える・接続詞を使い分ける・一貫性を確保する・引用する・問題点を整理する・推敲する等
まとめ	授業外	レポートのアウトライン作成	構成を考える・接続詞を使い分ける・一貫性を確保する・引用する・問題点を整理する・推敲する等
	第15週	資料Ⅱ読解・レポートの構成検討	
	授業外	レポートの作成・提出	

### 3.3 メタ認知の活性化を促す方法

メタ認知の活性化を促すために、次の2点を行った。

#### (1) 学習ストラテジー(learning strategies, 以下、LS)の明示的提示と利用

- ・提示したLS: O'Malley & Chamot (1990) や Oxford (1990) に基づく JASET・LS 研究会(2005)のLS分類を参照して、メタ認知ストラテジー、認知ストラテジー、社会・情意ストラテジーの3種の中から大学での学習、特に発信に必要な論理性や構成力等についてのLS、および、文章の論理的読解に必要なLSを選んで提示した。
- ・LS意識化: LSを使う「準備」、「活動」、「振り返り」の手順で行った。
- ・LSを利用して行う活動: 課題解決、(学習や生活へのサポートを得るための)人間関係構築等、困難を感じる行動に関するタスクを提供しLSの利用を促した。

#### (2) 内省活動の定期的実行

- ・学習者の活動: 毎授業の最後に、学習活動に対する数行の内省文を日本語で記述し提出するようにした。ストラテジーについての内省を特に求めることはせず、取りあげた素材の内容理解、学習方法(LSや学習への取り組み方を含む)、学習のプロセス等

について、自由に選択し記述してよいことにした。

- ・教師によるフィードバック：各内省文にコメントを書き、翌週の授業で返却した。

#### 4. 分析データおよび分析方法

分析の主対象としたデータは、学習者が毎授業後に記した内省文、コース終了後に行った期末面談調査である。内省文は授業直後の学習者の印象、期末面談調査資料はコースを総括的に捉えた印象を反映すると考えられ、授業に組み込んだ活動を学習者がどう捉えどのように活用したかを知るための主なデータとして利用した。期末面談調査は、コース終了の約2週間後に実施し、授業に取り入れた諸活動に対する反応を半構造化インタビューで尋ね、できるだけ忠実に文字化してデータとした。フィルターの一部や沈黙についての情報は適宜簡略化し、意図が伝わりにくいと思われる箇所に（筆者注）と記して補足した。

事例研究の手法を用いて「ストラテジーについての意識」と「メタ認知活動」を中核として分析し、得られた結果の妥当性を確認するために、コース開始時と終了時に本人が記した学習目標・自己評価表と教員による行動観察資料をメタ認知の変化を捉える補完的なデータとして用いた。

データの採集および利用に際しては、研究の目的や自由意思に基づく参加等についての説明を口頭および書面で行い、学習者全員から書面による参加協力同意の表明を得た。

#### 5. 結果及び考察

##### 5.1 学習者の内省の全般的傾向

学習者A.B.C.Dの15週分の全内省文(15週目の「学期末ふり返り」の記述を含む)から、学習ストラテジーについての意識と学習についての認識や行動に関して、69の叙述が得られ、表3に示した8つのカテゴリーに分類された。学習ストラテジーについては、それらを理解したことを示す(①)だけでなく、その困難を認識しながらも有用性を確信して積極的に使おうとしていることが確認された。学習についても、自己観察と目標設定が行なわれていることが窺えた。授業に組み込んだ活動が学習者の自律的学習能力の向上を誘発していると考えられた。

表3 内省文に現れた認識や行動

カテゴリー		A	B	C	D	計
学習ストラテジーについての認識や行動	①学習ストラテジーの機能や使い方の理解	4	2	3	4	13
	②学習ストラテジー活用の困難さの認識	0	2	0	1	3
	③学習ストラテジーの有用性の認識	2	1	3	4	10
	④学習ストラテジー活用への積極的態度	3	3	3	3	12
自分の学習についての認識や行動	⑤問題認識や成功体験に基づく意欲の表れ	1	5	2	1	9
	⑥自己の状況の認識と改善方法の選択	2	2	3	2	9
	⑦自己の目標設定と学習への前向きな態度	4	2	3	0	9
	⑧学習に対する自信や向上の表れ	1	1	1	1	4
計		17	18	18	16	69

##### 5.2 個々の学習者の認識や行動の変化

###### 5.2.1 内省文の分析

個々の学習者の変化の様相を具体的に知るために、前節で述べた 69 の叙述から特徴的な部分を学習者別に表 4-7 に示した。内省文の冒頭の番号は授業実施週を示す（例：「02」は「第 2 週目」）。[ ]内は、表 3 のカテゴリ番号である。

表 4 学習者 A の内省文

06	ブレイクダウンでインタビューの質問がより具体化していくことが分かりました[①]。
10	レポートの構成で、はじめにテーマに関する現状の説明とテーマ設定の理由またその調査方法を示して、次にインタビューの結果を表にまとめ示す。次に、表をもとに考察を述べる。次に全体のまとめを示すことを確認できました[①]。
11	レポートのレイアウトについて意見交換ができたのでよかったです。今回から学習ストラテジーを意識しながら思考をしていきたいと思います[④]。
12	今回の課題のインタビューでもブレイクダウンして質問してみても良いかなと思います。なぜなら、予想のつかないアイデアが生まれるかもしれないからです[④]。
13	問題点を整理して問題点を焦点かすために分類の観点を決めて、カテゴリ化することが大切と分かりました。そこで、焦点かした問題点から課題を決めてレポートを書こうと思います[⑦]。
15	今回の授業でレポートのストラテジーがよく理解できました。特に、レポートの構成の部分を考えるとき、図で書きながら考えるとレポートがよく書けると感じました[③]。 〈学期末ふり返り〉レポートの書き方におけるストラテジーが身につきました。また、日本語のコミュニケーション能力が向上しました。論理的な思考ができるようになりました[⑧]。

上の表 4 からは、学習者 A が第 10 週でレポートの構成の重要性を認識して以降、「構成を考える」というストラテジーを第 11 週～第 15 週においても継続的に利用していることがわかる。「問題点を整理する」「焦点化する」「図で書いて考える」等も、レポートの構成ストラテジーとして明確に意識されている。第 6 週で意識した「ブレイクダウン」は第 12 週にも活用を試みている。「学習ストラテジーを意識しながら思考していきたい(第 11 週)」という内省通り、A は、自らの目標意識に基づき、ストラテジーを思考の道具として選択、活用し、その結果、論理的な思考力が向上したと実感するに至っている。

表 5 学習者 B の内省文

03	論点表示文はどんな文章かはじめて勉強しました。そして、文章の構造の分け方はもっと分かりました。今度文章を書くとき、この着目を意識しながらすばらしい文章を書きたいです[④]。
04	今日の授業で結論表示文の特徴を学んで、ストラテジーがよく分かりました。次に文章を書くとき、判断の文やまとめる言い方を使ってみたいです。文章の書き方がもっと上手になりますように頑張りたいと思います[①④]。
09	今日の問いを立てるストラテジーがよく分かりました。自分にはもっとはっきりインタビューの問いを決めたほうが良いと思います。聞きやすい問題を考えていますので、課題のタイトルを決めるのも難しいです[①②]。
10	レポートを論理的に書くストラテジーを使えば、一貫性がある文章を書けると思いますが、でも、結果と自分の考察について、ちょっと難しいので、今まで考えていなかったことです。次のレポートで使ってみたいです[②④]。
15	色々なストラテジーを勉強した。とても役に立つと思う。文章の構成や一貫性を意識しながら、最後のレポートをうまく書けるように頑張りたいです[⑦]。 〈学期末ふり返り〉授業で色々なストラテジーを学んで、前よりは論理的な文章を書けるようになった。(中略)色々勉強になりました。もっと日本が好きになる[⑧]。

表 5 の学習者 B の内省文には、読解ストラテジーの活用を書くという別の技能にも応用を試みていること（第 3、第 4 週）が表れている。また、ストラテジー使用への意欲を感じながらも、その困難を認識しているという第 10 週の記述からは、ストラテジーが記憶すればよい単純な知識ではないことを理解していることがわかる。「今まで考えていなかった（第 10 週）」や「前よりは（第 15 週）」という記述からは、読解ストラテジーの学習が学習全般の質的変革の契機となり、終了時の満足感に繋がったことが認められる。

表 6 学習者 C の内省文

06	今日のストラテジーは、大きな課題をもとにして複数の小さな問いを作った。それをもとにしてこれからのインタビュー調査に使える。自分の目標は課題に適切な解答を見つけたのである〔④〕。
07	今日のストラテジーは、インタビューの結果を発表する。インタビューの結果が課題の結論とずれているがなぜそうなったかなんとなく分かる。自分はこれから課題があったら、これをもとにもっと練習しようと思う〔⑥〕。
10	今日のストラテジーは、構成を考えて論理の一貫性を考えることである。課題の結果を解釈して考察でまとめるということが重視しなければならないと分かった。これから、インタビュー結果に基づいて〔①〕。
11	今日のストラテジーは、自分の課題を焦点化して説明するとアドバイスをするストラテジーであった。課題の設定はややできないと思っているが、課題のブレイクダウンにまだまだ工夫が必要だと思っている〔⑥〕。
15	今日のストラテジーは、参考文献の引用・要約と論理の展開を考えると接続的表現を使い分けることである。自分は最後の課題にもこのようなストラテジーを生かせるようにがんばる〔⑦〕。
<p>&lt;学期末ふり返り&gt; 日本事情の授業で、日本語能力が前より成長できたと思う。特に、論文やレポートの書き方についてもいろいろなストラテジーを学習した。勉強の内容だけでなく自分に合う方法や効果的な方法なども身につけることが一番良かったと思う〔⑧〕。</p>	

表 6 の学習者 C の記述は、学習への強い意欲（第 6、第 7、第 11 週）とともに、「結果が課題の結論とずれている（第 7 週）」や「課題の設定ができない（第 11 週）」等、問題の明確な認識を示しており、それが、第 10 週の「学習ストラテジーの役割の理解」と連動していることが窺える。学習者 C は「学期末ふり返り」において、日本語能力の向上だけでなく、ストラテジーの使用経験を通して自分の学習方法を模索できたことを大きな成果と捉えており、ストラテジー学習が日本語能力向上の実感に繋がったことが示唆された。

表 7 学習者 D の内省文

05	血液型はマレーシアではあまり人気がないが、日本人人気であることを知らなかったのので、さいしょは分かりにくい。日本人はこのことを信じている理由が知りたい。答えを知るためにはやっぱりインタビューをするのが一番いい解決だと思う〔⑥〕。
07	みんなから発表した結果から、人々にとって違う考えだった。信じている人と信じていない人の理由もはっきり分かるようになった。周りの人の意見を聞いてみたらその人の考えが分かって、人間的にいいと思う〔③〕。
11	今まで色々なストラテジーを学んだ。これから、科目の授業で使っていいと感じている。友達と相談したり、アドバイスをもらっていたり、インタビューのすすめ方がはっきり分かる。後は、インタビューをしてレポートを作成する〔③〕。
12	他の人の意見を聞いてみると、もっと良いレポートの構成やしかたとか得られるし、良いレポートを書ける。アウトラインの大切さを分かるようになった〔③〕。
15	引用するとき、どのように引用すればよいのかを学んだ。剽窃することはダメという

ことから要約しないとイケない。レポートを書く前にアウトラインを構成する必要がある[④]。  
 <学期末ふり返り> このクラスをきっかけに、日本人と話す機会が広がる。知識も増えるし、楽しかった。色々なストラテジーを学ぶから、勉強のことだけでなく色々なところで使える。何かをやる前に構成を立てることが必要であることが分かった[⑧]。

学習者 D は、3 年次に編入した学生であり、人間関係構築に困難を感じていた。表 7 の内省文には、他者との関わりへの強い関心と、他者と共に学ぶストラテジーの有用性を強く認識したことが表れている（第 7、第 11、第 12 週）。C は、「学期末振り返り」で「構成を考える」ことはレポート作成だけでなく「何かをやる前に」必要な手順であると述べており、ストラテジーが大学での学習や活動全般に繋がるということが認識されたことがわかる。

### 5.2.2 期末面談調査結果の分析

表 8 は、「ストラテジーについての意識」と「メタ認知活動」に関わる学習者の認識を捉えた面談調査の結果である。学習目標・自己評価表の項目の一覧は紙幅の都合により割愛した。そのため、番号のみの回答には(筆者注)として項目内容を補足した。A~D は学習者を示す。

表 8 面談調査の結果

<p><b>質問 1.</b> 学習ストラテジー(LS)って何ですかと聞かれたら何と答えますか。授業で LS を使う経験をして、勉強の面で前の自分と何か変わったと思うことがありますか。</p>
<p><b>A:</b> 何って聞かれたら、思考のプロセスの一種だよって言います。たとえば、物事を考えるときに、まず、目標、焦点、計画を決めてから、その根拠となるものを説明して、その次自分の意見を主張する。という流れなので、ものを理論的に考える一つの…ストラテジーかな。(中略) 焦点を絞ることとブレイクダウン、それをしてから考えやすくなりました。変わったのは意識するようになった。たとえば、結果、いつも、文章を書き終わったら、最初の目標、焦点を見て、もう一度読んで、流れがちゃんといってるのかとか。</p> <p><b>B:</b> ストラテジーを使って、勉強をうまくいける。役に立つ。(中略) 多分、長い文章を読むとき、キーワードを探して、もっと、筆者の話したいことよく分かります。(中略) まえ、このストラテジーが知らなかったの、試験のとき、(中略) 長い文章を読むと、結論とか全然分からなくなって質問を答えられなかった。</p> <p><b>C:</b> (筆者注:LS が) あったら、道が明るくなります。(中略) これから何をやるかははっきり見えます。(筆者注:資料を読むとき) どんな点に注目すべきか分かるかな…。(筆者注:変わったことは)…(考えこんで) 分からない。</p> <p><b>D:</b> (筆者注:LS は) 勉強の仕方がよくするために、そのことを使います。(筆者注:変わったことは) 昔は、文章を読むとき、一個一個のことばを読むことから、時間は長くなる、ですが、日本事情の科目から、キーワード、時間を短くするときにキーワードを探します。(中略) 読みやすいし、もっと、自信が高くなります。</p>
<p><b>質問 2.</b> 学習目標・自己評価表の学期はじめとおわりを比べて、よくなったからうれしいという項目がありますか。</p>
<p><b>A:</b> 「書く力」が上がったことと「自分の勉強について振り返る」と「勉強の方法についても考える」。②番(筆者注:書く力(自分の考えを論理的に書いて伝える))は一番ほしい、伸ばしたい部分だったので。書くことは、大学の勉強で必要ですよ。(筆者注:今まで、自分で、何かどうかしたいとかあったんですか) もうちょっと、論理的に、伝え…分かりやすく書けたらいいなって思ってたんで。</p> <p><b>B:</b> 「自分の考えを論理的に書いて伝える」。これはよかったと思います。前より上手になりました。「周りの人とのコミュニケーション」。「自分の勉強について振り返る」。(中略)</p>

前は、意識してなかった。振り返りを書いたとき、今日は何を勉強した、ちゃんと書いて気づいてよかったですと思います。そして、自分の不足の部分を復習してやり直したりとか、そして、先生のアドバイスがある。

C: 「書く力」と「話す力」。レポートの書き方と、どんな書き方がいいかがわかった。「話す力」、ほとんど、ほかの授業はほとんど話してない、日本事情だけ日本語で話しているから。それと「周りの人とのコミュニケーション」。日本人にインタビューして色々話したから。(筆者注:勉強のやり方は)あまり…。

D: 「周りの人とのコミュニケーション」。前は、言いたいけど、恥ずかしい。今は、色々なインタビューをしてから、他の人と話ができます。「読む力」と「書く力」が変わってました。「書く力」は、書く言葉と話す言葉と違いがありますから、今は、その違いが分かるようになりました。日本語の科目に(筆者注:科目を)生かして、日本語の資料をたくさん読むから、それがいいだと思います。⑩番(筆者注:勉強の内容だけでなく、自分にあう方法や効果的な方法など勉強方法についても考える)。前は自分で勉強するだけ。今は、ほかの人と交流して、ほかの人の意見を聞きます。勉強のやり方は効果的。

学習者4名にとって、ストラテジーを使用するというアプローチや自己評価は初めての経験であり、授業後の内省文ではその有用性を全員が積極的に評価していた。しかし、最終回の授業から2週間後に行った面談調査の結果からは、学習し経験した事柄を意味付け応用していく過程に学習者によって若干の違いがあることが示された。学習者A・B・Dは、授業で学んだことを総括的に捉え、「自分の勉強について振り返る」と「勉強の方法についても考える」等の学習の方法にも着眼して、自己の向上を捉えていたが、学習者Cは、学習した個々の項目や日本語の能力の向上に意識が集まり、学習し経験した事柄の全体的な影響やその経験を他の学習や大学生活に利用できるという意識は未だ生じていないと考えられた。

こうした差異が何に起因するのか今回の分析からは不明であり、推測の域を出ないが、いくつかの要因が考えられる。日本語能力、学習スタイル、ストラテジーのコスト意識(竹内2003)等の複数の要因のうち、学習者Cについては、学習ストラテジーの意識的使用や内省活動等の不慣れた活動に対して「有効性は高いが大変だ(コストが高い)(竹内 同上)」という意識が働いているのではないかと考えられる。コースを通じて大変真面目に取り組む姿が見られたCであるが、他の3人と違って、次に学習するとしたら課題解決学習よりもテキストで1課ずつ勉強する授業が「慣れているからいい」という趣旨の発言から、新たな学び方には消極的な態度が見られた。Cのような慎重な学習者への対応として何が可能なのか検討する必要がある。

### 5.3 考察

以上の分析から、日本語授業に組み込んだ「学習ストラテジーの明示的学習」と「内省活動の定期的実行」という2つの活動が、学習者の自律的学習能力の向上を誘導する効果をもたらす可能性が高いことが示唆された。

学習者間には、組み込んだ活動の捉え方やストラテジーの活用程度に若干の違いが見られたが、それぞれの学習者が自己の目標や必要に応じて学習ストラテジーを選択して活用し、ストラテジーについての意識化を進めていた。また、内省活動を契機として自己の学習を観察し評価していた。つまり、学習にはよりよい方法すなわち学習ストラテジーがあるということへの認識と、ストラテジーを行使する前提としての自己評価が、学習者に



共通して観察された。授業に組み込んだ二つの活動がこれらの認識と評価を行う契機として機能し、本研究が目指す自律的学習能力が学習者の中で向上しつつあることが認められたことから、自律的学習能力の向上を支援する方法として有効であると考えられた。

## 6. おわりに

本研究では、きっかけが教師の主導や要請であったとしても、課題意識を持つことが必要で成果を学習者自身が認識できる言語活動と内省活動を一定期間継続的に行えば、学習者自身のメタ認知を促して自律的学習能力を向上させる可能性があることが示された。この影響が持続的であるかどうかを知るために、一定の時間が経った時点での学習者の認識を調査し検証することが今後の課題である。

(長谷川順子はせがわじゅんこ・九州大学大学院博士後期課程)

## 参考文献

- 青木直子 (1996) *Autonomous Learning: What, why and how*, ASTE Newsletter.
- 青木直子・中田賀之 (2011) 「学習者オートノミー」青木直子・中田賀之 (編)『学習者オートノミー 日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房, 1-22.
- 三宮真智子 (2008) 『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房, 1-73.
- 竹内理 (2003)『より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究』松柏社, 229-239.
- 田中望・斎藤里美 (1993)『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館, 13-29.
- 大学英語教育学会(JASET)学習ストラテジー研究会 (2005)『言語学習と学習ストラテジー—自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ』リーベル出版, 31-45.
- 札野寛子・辻村まち子 (2006)「大学生に期待される日本語能力に関する調査について」独立行政法人国立国語研究所 (編)『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク, 221-257.
- 堀井恵子 (2006)「留学生初年次 (日本語) 教育をデザインする」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房, 67-78.
- 溝上慎一 (2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, 3-24.
- 村上京子 (2003)「留学生と日本語教育—学部留学生の実態と問題—」『留学交流』3, 6-9.
- O' MALLEY, J. M., & CHAMOT, A. U. (1990) *Learning strategies in second language acquisition*, Cambridge, England: Cambridge university Press
- OXFORD, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*, New York: Newbury House
- WENDEN, A (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy*, Prentice Hall Europe